審　査　の　結　果　の　要　旨

ソレマニエ　貴実也
（福元）

本論文は、19 世紀半ばから 20 世紀初頭、ヨーロッパ列強が植民地化を推し進めた時代を採り上げ、日本同様、主権国家として独立を守り続けたイラン、ガージャール朝の首都テヘラーンに着目し、現存建造物を始めさまざまな史料から、その都市と建築の変遷をとらえようと試みた研究である。

中でも、西欧化を推し進めた第 4 代君主ナーセロッディーン・シャーの治世に注目し、従来のガージャール朝衰微説を否定し、多様な文化の融合の時代としてガージャール朝期を評価している。そしてこの多様な文化の融合の時代に、現代イラン国民の基盤となっている文化や思想が形成されたと説いており、興味深い点である。

本論文第 3 章では、ナーセロッディーン・シャーによるテヘラーン拡張工事と首都整備計画に注目し、北の新市街に現れた意図した西欧化の背後に、イスラーム教シーア派国家としての伝統を尊重した南の新市街建設が隠されていたことを読み解いたことは大きな成果といえよう。そして王自身がそれを自覚し、北に向かう西欧化と南に向かう伝統を使い分けたことを指摘している。

更に、ガージャール朝期に作成されたテヘラーンの数葉の古地図を丁寧に解析し、全ての記載事項を一覧化し、これ等を整理しながら都市の解析を試みたことも評価に値する。解析の結果、実際の都市計画では意図されていなかった旧市街と新市街の隙間部分に、イラン各地からテヘラーンに流れこんだ様々な人々が定住し、新街区を形成していたことを指摘している。これは興味深い発見であり、大きな成果である。

第 4 章では、当時のバーザールの建造物の解析を通して、商人層やイスラーム学識者層が、伝統的な旧市街に固執した意味を、単に伝統だけではなく、建築空間の変遷から考察している。更に本章では、商人達が富の集積に固執した姿勢を明らかにし、商業区域の中での中心の動きを明確に解明している。

第 5 章では宮殿建設に着目し、ナーセロッディーン・シャーによる西欧化を意識した宮殿建築の建設を指摘していると同時に、第 2 代君主ファタリー・シャー以来のペルシア古典復興主義的スタイルが脈々と継承されていることを明らかにしている。加えて、鉄板葺寄せ棟屋根や高層建築、観音開きの扉など新たなスタイルの登場をも指摘し、多様なスタイルの共存と融合を記している。更に、王とヨーロッパ帰りの建築家、そして伝統的工人との関係から、王の西欧建築への憧憬がイランの伝統工人によって達成されたことを指摘している。

第 6 章では住宅建築を採り上げ、現地調査資料より、19 世紀の住宅を解析している。これによって、西欧や古代への視線が王だけではなく、市民階級の人々にも行きわたってい

たことを指摘し、彼らが伝統的住宅に新たな要素を無作為にあてはめていく姿勢が明らかにされている。

そして第 7 章では 20 世紀初のテヘラーンとその諸建築に着目し、ガージャール朝崩壊後パフラヴィー朝によって、西洋化と古典復興主義の融合が一層加速していった様子を指摘している。そしてこれに伴い伝統文化が軽視され、その歪みがイラン・イスラーム革命に繋がっていると述べている。

更に第 4 章にて採り上げたバーザールの 20 世紀以降の変遷を現地調査より解析し、今日のバーザール中心地がガージャール朝期に開発された区域であることを指摘し、今も尚テヘラーンの経済中心地であるバーザールの持続と成長を紐解いている。

上記の項目より、本論文は様々な文化と価値観がバランスを取りながら都市を築いていたガージャール朝期を再評価した新しい研究である。

よって本論文は博士の学位を請求する論文として合格と認められる。